

序

循環器用薬の使い方をまとめた書籍は多く出版されています。専門医、一般医、研修医、薬剤師、看護師などさまざまな職種向けにレベルを合わせてまとめられており、それぞれには特徴があつて有用です。さらに最近では、一般の方向けの本まであります。これらの本は、医薬品適正使用を目標に、医療用医薬品添付文書に準拠した医薬品情報に加え、臨床エビデンス・経験などが基盤となっています。特に医薬品情報においては、警告、特定の疾患や生理的状态に対する禁忌・慎重投与、併用禁忌・注意、副作用のチェックといった「使用上の注意」によって、薬剤の選択や用法用量などがきめ細かく制限されています。しかし、「ではどのように相互作用や副作用を回避したらよいのか?」「用法用量はどのように変更したらよいのか?」「代替薬としては何があるのか?」などの対処法や代替法に関する情報はほとんど記載されていません。そのような要望に可能な限り答えるようにと企図されたのが本書です。

しかし、今回の執筆陣は医薬品情報の達人の先生方ですが、大変にご苦労されたと思います。というのも、循環器用薬は、ある1つの薬剤を取り上げても、多種類の疾患に適応をもっていますし、また特定の疾患には、多種類の薬剤が使用されます。このようなことから、代替薬や代替法をそれぞれの薬剤、それぞれの疾患で対応するように工夫してまとめ上げることは至難の業といえます。したがって、本書では、対応策に関してエビデンスの不足から代表的な情報に限定せざるを得なかったり、対応不可能とせざるを得なかった場合があります。この点、ご容赦いただきたいと思います。

各薬剤について、前半部分は、医療用添付文書に準拠した情報をわかりやすくまとめました。後半部分は、本書の特徴である同効薬の種類、他の同効薬と比べた特徴、最適な症例、適さない症例、用法用量の調節、代替薬の選び方と処方変更時のポイント、治療効果がみられなかった患者や副作用が発現した患者への対処法などをまとめました。十分な情報が得られず、まとめることが困難な場合もあります。今後は、新たに見出される医薬品情報を付加していくことによって、さらに有用な本へとブラッシュアップしていくものと考えています。

以上、編者の意図するところをまとめました。皆様の日々の診療、薬剤業務にいくらかでもお役に立てれば望外の喜びです。

2012年8月

澤田康文